

広島派遣報告



▲平和の集いに出演した令和4年度派遣中学生と我孫子中学校演劇部

令和4年12月4日(日)、けやきプラザふれあいホールにて「平和の集い～我孫子から平和を願う～」を開催しました。派遣中学生たちは、広島で学んだことや感じたことを、スライドを交えながら報告しました。

本書では派遣中学生による報告を一部抜粋してご紹介します。

「死体に間違われて焼かれてしまうと思い、
寝なかったんだ」

「一人だけ生きていることが申し訳ない…」



みなさんは、このようなことを考えたり、このような気持ちになったことはありますか？

この言葉は広島で実際に語られた言葉です。



布佐中・菅光祐さん



我孫子中・長谷川千晃さん



1945年8月6日、午前8時15分。

原子爆弾は地上から約 600mのところで爆発。強烈な閃光を放ち、100万度を超える火球となり、莫大なエネルギーが放出されました。

1秒後には半径200mを超える大きさとなり、爆心地周辺の地表面の温度は 3,000～4,000 度に達しました。

爆発の瞬間、強烈な熱戦と放射線が四方へ放射されるとともに、周囲の空気が膨張し超高压の爆風となり、これらの3つが複雑に作用して大きな被害をもたらしました。

爆心地から 1.2km では、その日のうちにほぼ50%の人が亡くなり、それよりも爆心地に近い地域では80～100%の人が亡くなったと推定されています。



我孫子中・鈴木綾乃さん

我孫子市

我孫子市平和事業

広島 13回 派遣生徒 165名
長崎 4回



私たち12名は、各中学校を代表し、我孫子市の派遣中学生として広島を訪れ、現地で77年前に起きたことを見、聞き、肌で感じとってきました。

我孫子市では「我孫子市平和事業」として、2005年から毎年、中学生が広島・長崎に派遣されています。

昨年までに、のべ165名の中学生が派遣されており、現地で多くのことを学んでいます。今年3年ぶりに、原爆投下の日の平和記念式典に参列することもできました。



事前説明会・事前学習会等

7月21日、広島派遣の事前説明会が行われ、私たちは各学校の代表として市役所に集まりました。



◆令和4年度 中学生派遣事業 事前説明会・事前学習会等◆

日時：令和4年7月21日(木)午後2時から5時

場所：我孫子市役所 分館1階 大・中会議室

【事前説明会】午後2時00分から午後3時00分

- ・我孫子市平和事業推進市民会議 北嶋会長からの挨拶
- ・派遣中学生・引率者の自己紹介
- ・派遣行程及び派遣における注意事項、質疑
- ・団長・副団長の決定、見学グループ分け、部屋割りなど

【事前学習会】午後3時5分から午後3時45分

- ・我孫子市原爆被爆者の会の方からのお話 的山 ケイ子さん
- ・派遣中学生 OB・OG からのお話
 - 原 直輝さん(平成28年度長崎派遣・大学2年生)
 - 高須 万悠香さん(平成29年度広島派遣・大学1年生)
 - 根本 茜梨さん(平成30年度広島派遣・高校3年生)
- ・質疑・意見交換

【市長・教育長との懇談】午後3時50分から午後4時30分

- ・市長からの挨拶
- ・教育長からの挨拶
- ・派遣中学生自己紹介・抱負
- ・意見交換



私は当時不安でしかありませんでした。このメンバーで大丈夫なのか、仲良くなれるのか、言葉に表せない気持ちがありました。



当日は、我孫子市原爆被爆者の会の会長である、的山ケイ子さんからお話をいただきました。

的山さんは長崎で胎内被爆をされており、自身の体験談をお話してくださいました。



湖北中・川坂晋矢さん



そして、今年度私たちのサポートをしてくださる、大学生の原さんは、平成28年に派遣団として長崎を訪れており、当時のお話などをしてくださいました。
また、原さんだけでなく、OGの高須さん、根本さんも来てくださり、私たちが広島に向かうにあたりアドバイスをくださいました。



星野市長からは、「派遣団として、1人の中学生として、実際に見て、聞いて、感じて、実際に肌で感じたものを大切にしてほしい。そして我孫子の後輩たちへつないでほしい」とお話をいただきました。
丸教育長からは、雰囲気をも明るくさせるための温かい言葉や、私たちへの期待を込めた言葉をいただきました。
たくさんの方からのお話をいただき、私たちの決意や心構えが芽生えました。

1日目



8月5日、緊張と不安もありましたが、新しい仲間との3日間への希望と、派遣団としての使命をもって、けやきプラザ前に集合しました。

団長である田中千尋さんが、お見送りに来ていただいた保護者の方や先生方、市役所の方々に挨拶をして出発しました。



最初は緊張して、不安もいっぱいでしたが、新幹線に乗るころには緊張も解け、仲良くなっていました。



湖北台中・榛葉央河さん



広島に着き、昼食をとった後、広島平和記念公園に向かいました。バスを降り、少し歩くと目の前には原爆ドームがありました。原爆ドームは、写真で見たときとは違い、迫力と広島の地で起きた原爆の悲惨さを表していました。そして、原爆ドームは原爆の被害を受けたのに、なぜ残っていたのかを考えたとき、原爆ドームは平和の象徴として、広島の復旧の証として後世に繋げて行くために残されたのだと感じました。

原爆ドームの先に、動員学徒慰霊塔があります。勤労奉仕に動員された学徒は三百数十万人、その中で犠牲になった人は1万人、その中で7千人余りが原爆死でした。

塔の高さは12メートル。平和の女神と、八羽の鳩がいます。塔は5層で、中心の柱には慰霊の灯明がつくようになっています。





国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、展示されていた家族写真に目を向けました。写真では笑っていたけど、それが本当の笑顔で幸せなのか、と思いました。そして、派遣に同行していた宮田さんの旦那さんの写真が平和祈念館に収められており、宮田さんは旦那さんの写真を見て「久しぶり、ただいま」と言っていて、聞いていて泣きそうになりました。ただいま、という言葉の重さを感じました。



平和記念資料館で私たちが見たものは、どれも心に響くもので、言葉に出ない悲しさや辛さがありました。写真の中には目をそむけたくなるようなもの、実際に起こっていたと考えると心に突き刺さるものがありました。日常的な言葉の重さや、生きることの大切さ、命の尊さを学ぶことができました。

翌日に平和記念式典が行われる会場を見て、「こんな大きい場所に、人がいっぱい来るのか」と驚きました。訪れる人の多さから、核の恐ろしさを改めて感じました。



記念碑の前で祈った時、私は「安らかに眠ってください、日本では戦争が終わり平和の国になりました」ということを伝えました。

追悼平和祈念館、平和記念資料館など、たったの数時間で、心に大きなことが刻まれました。それだけ大きな経験ができたということを感じました。



湖北中・川坂晋矢さん



夜にミーティングが行われました。1日の反省や明日につなげるべきことなど、様々なことを話し合い、1人ずつ発表しました。発表を聞き、私たちの平和に対する想いがひとつになった気がしました。



市長さん、教育長さんのお話はとても勉強になりました。知らなかった知識や情報を教えていただきました。私が特に印象に残っているのは、資料を見るときの写真と絵の違いです。写真は実際に起こったことで、絵は描いた人が見た世界の印象だそうです。つまり絵には描いた人の想いや状況も表れているのです。その言葉を聞き資料の見方が大きく変わりました。

1日目は初めてのことが多く、たくさんを学びました。例えば初めて生で見た原爆ドームは思っていたよりも大きく、今にも崩れそうでした。やはり、その場に行かないとわからないことがあると思いました。こうして広島派遣1日目が終わりました。



久寺家中・松浦篤志さん

2日目



2日目は平和記念式典に参加しました。今までテレビなどで見ることはありましたが、実際に参加することはとても貴重な体験でした。当日は早くから交通規制が始まり、多くの人が平和記念公園に集まりました。日本人だけではなく、海外からたくさんの方が訪れていることに驚きました。式典が始まると厳粛な空気が流れ、岸田首相をはじめ、国連事務総長など海外からも数多くの方が平和への祈りを捧げに来ていました。

そして、厳かな雰囲気の中、原爆死没者名簿が奉納されました。今年は追加奉納者として4,978名のお名前が奉納され、のべ33万3,907名の霊を慰め、恒久平和が祈られました。その様子を見て私は、77年が経った今でも4,978名の名前が奉納されるということがものすごい被害を物語っていて、当時の悲惨を改めて感じました。



広島市長は原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の意を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現にむけての決意を誓われました。その中で「為政者に核のボタンを預けるということは1945年8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻もはやくすべての核のボタンを無用のものにしなければなりません。」という言葉がありました。

この言葉を受けて、今世界で起きている戦争に対して、自分たちはどのように向き合っていけばよいのか、学んだことをどう受け止めて伝えていくのかを深く考えさせられました。



布佐中・野尻千結さん



また、私たちが衝撃を受けたのが、子ども代表として平和の誓いを行った、バルバラ・アレックスさんと山崎鈴さんの言葉です。

「戦争は、昔のことではないのです。自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心もち、相手を理解しようとすることです。本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずで、過去に起こったことを変えることはできません。しかし、未来は創ることが出来ます」

その言葉に私は感銘を受けました。近年、あの日起きた事実、そして思いを伝えていく人々が高齢化により少なくなっています。そして、あの日起きた悲劇がいつの日か忘れ去られたら、元も子もありません。だからこそ、私たちのような、唯一の被爆国として残された若者があの日のことを、そして平和を訴えていかなければならないと思いました。



白山中・田中千尋さん



その後、我孫子市民の皆さんや私たちがそれぞれの学校で作った千羽鶴を「原爆の子の像」の下へ奉納しました。折り鶴には私たち中学生の『平和への祈り』が込められています。





その後、平和記念公園内を見学して回りました。被爆前、この一帯は「中島地区」と呼ばれる広島随一の繁華街で、たくさんの人々が行き交い、多くの人々が暮らしを営んでいました。しかし、原爆投下により一瞬にして焼け野原になり、もう草木が生えることはないだろうと言われていました。絶望的な状況の中、多くの人々が復興のために力をそそいだ結果、平和記念公園は原爆が落ちたとは思えないほど、緑にあふれていました。

そんな歴史のある平和記念公園では、公園内にある建物のなりたちや原爆投下前の広島
の歴史、投下後の様子などを含めた、原爆によって変化した広島のすがたを物語っているものが多く展示されていました。



湖北台中・佐野裕梨さん



悲惨な現状が事細かに書かれた説明板や、実際の写真などもあり、当時の状況をより深く知ることが出来ました。その中には、被害に遭われた方々の思いをつづったものや、私たちに対するメッセージなども多くありました。実際に被害を受けた建物などを間近で見ると、原爆がどれだけ悲惨なものか思い知らされました。また、大勢の人が足を運んでいましたが、その場にいた人たちの、言葉で表せないような苦しい表情はきっと忘れることが出来ないと思います。



ほかにも、当時の苦しい状況から、今後の平和を願って作られた多くの銅像などがありました。その中で私たちが特に目を奪われたのが、教師が亡くなった子どもを抱きかかえ、悲しみにくれているというものでした。

私たちとそれほど変わらない歳の人たちが教師として子どもの前に立ち、守れなかったひとつの命を前にして、悲しみ、苦しんでいた。そんな悲劇を繰り返していいのでしょうか。戦争は、原爆は、二度と繰り返していいものではない。改めてそう感じる機会になりました。

思い出したくもないほど辛い思いをした多くの人が、これからの未来を考え、二度と繰り返してはならないと後世に伝えていくために誓ったと思うと、これ以上、大切な命を、多くの人の思いを無駄にしてはならないと深く感じました。

それと同時に、これから戦争が起きないように、私たちが語り継いでいかなければならないと感じ、自分ができることの最善を尽くしたいと思いました。そして、様々なかたちでこの世界中のより多くの人に伝えていき、いつか争いのない日がくることを願って、訴え続けていこうと決意しました。





その後、平和記念公園からほど近い本川小学校平和資料館を訪れました。本川国民学校、現在の本川小学校は爆心地に最も近い学校として大きな被害を受けました。校舎は外郭を残して全焼壊滅し、校長ほか10名の教職員と約400名の子どもたちの尊い生命が一瞬にして奪われました。地下室を中心に当時の焼け跡が残るなど原爆の被害を受けた状態をそのまま残し被爆の証として保存されていました。展示品の多くは、かつての本川小学校の教師が被爆地から集めたものだそうです。

資料館の地下室には被爆直後の広島ジオラマが展示されていました。とても大きなジオラマでしたが、建物が崩壊して辺り一帯が更地になっている広島を見て原爆の恐ろしさを痛感しました。



湖北中 ジャシンリヤナゲ・あゆみさん



この写真は被爆から二年後の授業風景です。
授業とはいえ窓はなく床板もなく黒板もない。雨の日は雨漏りが激しいので、右に左に座席を移動するのに忙しく風雨の日は授業を休止しなくてはならない日もあったそうです。しかしでこぼこの教室で、子供たちはわずかな学用品で熱心に学習していたそうです



そしてこの写真は本川小学校の校庭で運動会が行われている様子です。
被爆直後、本川小学校は臨時救護所となり、校庭では亡くなった人たちが多く焼かれていたそうです。私はそのような火葬場として使われていた校庭で運動会が行われていたことにびっくりしましたが、この写真のようにみんなで円になり楽しそうに手をつないでいます。その様子を見て、辛いことを乗り越え前へ進もうとしているのだと思い、それは多くの人々に希望を与えているのだと感じました。
用具もあまりないけれど、みんなで運動会をした時の感激はかけがえのないものだったと思います。本来の学校は、こうあるべきなのだと実感しました。



次に、おりづるタワーを訪れました。ここでは、折り鶴を自分で折って奉納できます。私たちは一人ひとり、想いを込めて鶴を折り、タワーに奉納しました。奉納したスペースには沢山の鶴があり、人々の平和への願いを感じました。タワーの最上階から見えるきれいな景色は、被爆した広島復興を感じ、感動しました。



久寺家中・中濱陽香さん



広島城も訪れました。1945年当時の広島城には、江戸時代から残っていた天守閣と東走櫓(ひがしはしりやぐら)・裏御門の一部・中御門・表御門・二の丸の平櫓・多聞櫓・太鼓櫓などがありました。しかし、8月6日の原子爆弾の投下で、天守閣は倒壊し、門や櫓は焼失してしまいました。

一瞬で原型がわからないほどに崩れ落ちてしまった広島城。復元する際は、「原爆によってもう二度と倒壊しないように」という願いのもと、鉄筋コンクリートで作られたそうです。



とても内容が濃い2日目で、私たちの中での意見も1日目と変わってきました。式典に参加したり、復興した街の景色を生で見たりしたことで、一発の原爆により何もかも奪われた広島の人々の、復興へ向けてひとつになった強い思いを感じました。そして私たちが今過ごしている、この当たり前でかけがえのない1日を大切に過ごしたいと強く思いました。

3日目



3日目の朝は多聞院を訪れました。爆心地から1.75キロメートルの地点にあるお寺です。原爆によって本堂と庫裏(くり)が大破し、毘沙門堂や山門も倒壊しました。しかし、鐘楼は被害を受けてもなお、今もしっかりと立っていました。



今も残るその鐘楼で、鐘を突かせてもらいました。鐘の響きはどこまでも広がるように感じました。そこから眺めた景色は一味違った広島街を見せてくれました。生活の仕方こそ違うけど、この鐘に込められた願いは変わらないのだらうと思いました。



布佐中・菅光祐さん



その後、二度目の平和記念資料館を訪れました。
僕からは、ある一人の男の子のことを紹介したいと思います。

この子は広島原爆の被爆者の一人です。
この男の子はある悩みを抱えていました。
それは安心して寝ることができなかったということです。



『死体間違われて焼かれてしまうと、寝なかったんだ』

被爆当時の広島は、原爆の被害により建物は崩れ、被害を受けた人々が道に横たわり、亡くなっている人もたくさんいました。
亡くなっている人をそのままにしていると腐敗が進み、新たな病気などが広がる原因にもなるため、当時の人々は亡くなった人たちを火葬していました。

しかし、生きていてもひどい傷を負っている人もいたので、誰が生きていて、死んでしまっているのかがわからない状態でした。そのため、倒れている人を棒でつついて、反応があれば生きている、なければ死んでいると判断していました。
もし熟睡していて反応できなかつたら、死体と間違われて焼かれてしまう、殺されてしまう、そんなことを思ってこの少年はこんな言葉を残したそうです。

みなさんは夜寝る前、どんなことを考えますか。明日はなにをしよう、とか考えることはたくさんあると思います。まさか、夜寝ている間に家族や友達に死体と間違われて焼かれてしまう、そんなことを考える人はいないと思うし、考えたくもないと思います。
しかし当時の広島では、こんなことを考える人がたくさんいたのです。



その後、内藤慎吾さんの被爆体験講話を聴きました。内藤さんは、自身の実体験に即して、日常からの「原爆」を語られました。

内藤さんは七人家族の三男で、当時6歳でした。8月6日月曜日、原爆は広島に暗い影を落としました。運良く防空壕に飛び込み、難を逃れた内藤さんは、火傷を負った父と母、そして二人の弟たちとともに、2kmほど離れた飛行場に向かいました。全身火傷の父の手を、内藤さんは握ることが出来ませんでした。

飛行場についた時、父親は意識を失い、二人の幼い兄弟は亡くなってしまいました。

4日後、突然父が目を覚まし、「天皇陛下万歳」と言って、そのまま息をひきとりました。

内藤さんは、なぜ父が「戦争が憎い」「嫌だ」と言わなかったのか、と語っていました。

翌日、海岸沿いで兄と再会しましたが、発熱や嘔吐を繰り返すようになり、8月30日に亡くなってしまいました。

母は、もう一人の兄を探しに広島市内を歩き回りましたが、見つかったのは骨となった兄でした。

七人の家族は、いつしか二人になっていました。



我孫子中・長谷川千晃さん

それから8年間、母は工場で働き続けました。内藤さんを育てるために。しかし、毎日のように頭痛などに悩まされていました。

そして、1953年11月。母は倒れ込むように寝床につき、うめき声が聞こえ、そして息を引き取りました。

『一人だけ生きていることが申し訳ない…』

これは内藤さんの言葉です。段々と孤独になり、ついに一人になってしまった。それが自分だとしたら、どれだけ辛いでしょうか。想像もしたくないほどです。端的に言うならば、絶望でしょうか。話を聞いていると、その言葉が浮かんできました。

きっと私だったら、この話を派遣生に話せないでしょう。内藤さんも、長い間話せずにいたそうです。ですが、この苦しみが風化することはだめだという義務感に突き動かされ、私たちに、当時の惨状を思い出し、苦しみながらも語ってくれました。

それに応え、私は内藤さんが語ってくれた話を伝え続けていきたいと思います。





今回の広島派遣を通して、私たちは多くのことを学びました。実際に広島の地を訪れたことで、それまでの自分がどれほど無知だったのかを知りました。訪れる前は、リレー講座や教材を通して戦争に対して自分は知っている。そう思っていました。しかし、実際に訪れて自分の目で真実を見ると、まさに『想像以上』という言葉しか出ないようなものにとっても衝撃を受けました。

また、広島へ訪れると決まったとき、しっかりと学ばなければいけない、という責任を感じていました。ですが、実際に訪れて信じ難き惨状を知り、自分の中で「伝えなければならない」という義務感へと変わりました。このように学んだことを通して自分の中にさまざまな願いが芽生えました。



白山中・山口桜佑さん

～派遣後の活動～

被爆 77周年我孫子市平和祈念式典



派遣から一週間後の8月13日、私たちはアビスタに集まりました。我孫子市平和祈念式典に参加するためです。私たちは式典の前に、灯籠流しの灯籠を作りました。今年台風が重なってしまったため、灯籠流しを行うことはできませんでしたが、それぞれの平和へのメッセージを書いた灯籠を作りました。



私は、『思いを受け取り そして紡ぐ』と書きました。この広島派遣を通して受け取った、たくさんの方々の平和への思いを、後世へと紡いでいきます。

山口 桜佑

私は自分の灯籠に『No War』と書きました。
私にとっての No War とは無意味な死をもたらさないためのもの。自分の家族、誰かの家族や友人、大切な人を悲しませないために全ての人を守っていかなければならない、当たり前なことだと思っています。そんな当たり前な世の中が全ての国に訪れることを願っています。

田中 千尋



広島で一発の原爆により 77 年前に起こった悲劇を地球でもう起こらないように。また、核により当たり前の毎日が奪われることがないように。思いを込めて書きました。

中濱 陽香

私は、過去の過ちを繰り返さず、これからの未来の平和を思い、灯籠を書きました。

松浦 篤志



私は、二度と悲惨な出来事を繰り返さないよう、争いのない平和な日が訪れることを祈って、語り継いでいくことが大切だという思いを込めて、灯籠をつくりました。

佐野 裕梨

私は、『自分の意見を主張でき、他人の意見を尊重できる世界にしたい』という願いを灯籠に書きました。

榛葉 央河



私は、『すべての人々が笑える世界を』と書きました。
戦争や争いなどいろいろな問題で苦しむ人がいなくなり、心から幸せに暮らせる世界が訪れるよう願いを込めて書きました。

菅 光祐

私は、『笑顔が溢れる世界』と書きました。
笑顔は自分が安心して過ごしていないと生まれえないものだと思います。ですから世界中の人々が安心して過ごし、笑顔が溢れる世界を作るために、小さな力だとしても自分ができることに一生懸命取り組んでいきます。

野尻 千結



私は、平和なのが日本だけではなく、色々な国が平和になってほしいという願いを込めて、『世界平和』と書きました。

川坂 晋矢

私は、核がなくなった日本でこの先も笑顔で過ご
せますように、と書きました

ジャシンリヤナゲ・あゆみ



私は、『平和』そして『絆』という文字を書きました。
『平和』には、兵器に脅かされることはない、いつ
も通りの日常を送るという意味が、『絆』には、戦
争などない、協力していけるような世界になって
ほしいという思いを込めました。

長谷川 千晃

私は、やりたいことをやりたいようにできる今
の平和に感謝し、守っていく決意、また、戦争が
今も続いている国の人々にやりたいことをでき
る平和な日々がやってくることを願う気持ちを
言葉にして、灯籠に書きました。

鈴木 綾乃



それぞれの思いを書いた灯籠は、歴代の先輩方の灯籠と共にアビスタに展示されました。



私は、広島派遣の1日目から3日目までで、見てきたこと、聞いてきたことを思い出しました。どれも、被爆した人々など色々な人々が話したり、書いたりして残してくれたものでした。灯籠もその1つです。2日目に訪れた本川小学校には、広島の小中学生達が作った灯籠がおいてありました。過去の人々がそうしてくれたように、私たちも、それぞれの方法で記憶を、思いを繋いでいかなければならないと感じました。



平和祈念式典では、舞台上で自己紹介をしました。また、派遣団長の田中さんが派遣についての報告をしました。他にも千羽鶴の奉納や、献花、黙祷も行い、被爆した方々を悼む気持ち、そして、広島長崎の惨禍をもう二度と繰り返さない、という決意がより一層強くなりました。



我孫子中・鈴木綾乃さん

広島・長崎派遣中学生リレー講座 「未来を生きる子どもたちへ」

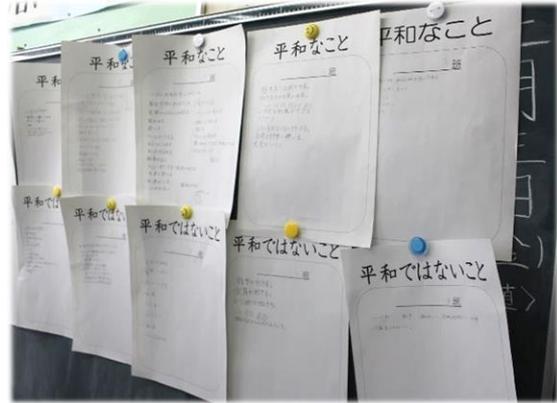


私たちの使命はここで終わりではありません。この3日間で学んだことや、この体験で考えたことを後輩たちに伝えていくことが、これからの私たちが行うべきことです。我孫子市では歴代の派遣中学生が小学校を訪れ、広島や長崎で起こった原爆の事実を伝える「広島・長崎派遣中学生リレー講座」を行っています。私たちも派遣後に、先輩方のアシスタントとして、いくつかの小学校を訪問させていただきました。

実際にリレー講座に参加してみて、小学生の皆さんが思っていた以上に原爆のことについて知っていてびっくりしたとともに、この歴史をしっかりと理解してもらえているんだという安心感がありました。また、グループワークの時にも、一人ひとり、とても面白い意見を出してくれていて、自分たちも毎回驚かされるばかりです。リレー講座の話に興味を持ってくれる人がたくさんいてとても嬉しかったです。



布佐中・菅光祐さん



リレー講座で感想用紙に「今回学んだことを一生忘れない。」と書いてくれた子がいました。この言葉を見て私たちが伝えていたことには意味があるのだ、伝えていくことで平和への思いが引き継がれていくのだと実感することができました。

現在、被爆者の平均年齢は84.53歳。
 実際に体験した方々から直接お話をいただける時間も限られています。後世に伝えていくためにも私たちがこのような活動を続けていき、まずは我孫子市から平和の木をつなげ、大樹にしていきたいと思えます。



布佐中・野尻千結さん